
まほろば

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほろば

【Nコード】

N4360F

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

終戦末期、日本軍は秘密裏に驚愕すべき戦艦を完成させていた。その名は「まほろば」。終戦の前日、その圧倒的な戦力で機動部隊を全滅させた「まほろば」は歴史から、世界から姿を消す。そして歴史は流れ、60年後・・・史実とはまた違った歴史を歩んだ世界は新たな脅威に直面していた。60年の歴史を経て、ついに伝説の戦艦がよみがえる。

ブローグ

この世界の昭和20年8月14日は我々の知る歴史とは少しだけ違う様相を見せていた。

「うん？なんだあの白いものは？」

太平洋上を北上するアメリカの機動部隊の前衛に駆逐艦「ミシシッピ」所属のゲイリー・フィンクス兵曹は海面上に白い大きな物体を見つけた。

望遠鏡でよくよく確認すると、どうやら艦船のようでブリッジのよくな構造物が見え、そのすぐ前には主砲とおぼしき大砲が据えられていたが彼に確認出来たのはそこまでだった。

正体不明の白い艦船が突如砲撃したのだ。

「海面上二時の方向に正体不明の艦船あり、武装している模様・・・」

伝声管を使って彼が言えたのはそれだけであつた。

次の瞬間、三発の砲弾が一瞬にして機動部隊の輪形陣を突破し、主力の正規空母三隻の機関部に命中した。砲弾を受けた空母はたちまちのうちに火災を起こした。

「いったい・・・何が起きたんだ！！？」

上空を警戒していたF6Fヘルキャットのパイロット、クリス・マッケンジー大尉が燃え盛る母艦を見た。もう、彼の艦の命運は尽きていた。傾斜し、至る所で爆発が起きていた。だが、上空警戒していたパイロットは更に悲劇を目撃することになる。

次々と輪形陣を形成する艦が爆発し始めたのだ。

「あれは・・・魚雷!!?」

クリスが目を凝らすとかすかに薄白い航跡が見えていた。日本海軍特有の酸素魚雷だ。だが、一撃で巡洋艦や戦艦を爆沈させるほどの魚雷は見たことが無い。航跡をたどると白い戦艦のような艦が見えた。

「おのれ、ジャップ!編隊全機!ヤツを沈めるぞ!!」

そうは言ったが、所詮は上空警戒のための部隊。機銃弾しか持ち合わせていなかった。それでも艦橋を狙えば、行動不能に陥るかもしれない。彼はスロットルをしばった。

彼の操るグラマン隊はたちまちのうちに白い戦艦にたどりついた。

「これが、船なのか・・・」

白い戦艦は彼の常識を遥かに超えた異様な形をしていた。

船体は白く、きれいなほどの流線型をしていた。艦にあるはずの煙突も機銃もアンテナ類も見当たらず、正方形の突起物のようなものが甲板に整列していた。砲塔は前に一基だけ。かなりの巨砲だが口径はわからない。艦の後部には武装らしい武装は見当たらず、

大きな推進部のようなものが存在した。もし彼に最先端の軍事知識があれば、「ロケットのようなもの」と言ったかもしれない。その両脇には同じような構造をしたフロートらしきものがつながっていた。いわゆる三胴艦だ。

上空から見た白い戦艦は感じて言う「山」と言う文字で形容出来た。

そうして彼が確認出来たのはわずか一秒ほどの時間だった。謎の白い戦艦の正方形のような突起物が開いたと思うとロケットが彼の編隊に飛来して来た。

一瞬のうちに彼の編隊は火の玉と化した。

「うおっ!!」

クリス機も被弾したが運が良かった。脱出する時間があつたのだから。

彼は脱出すると、すぐに落下傘を開かせた。

彼の眼前に見えた光景は悪夢と言うに相応しいものだった。まだ、敵艦が発砲して、わずかな時間しか経っていない。だが、もはや機動部隊は全滅していた。空母、巡洋艦はゆっくり沈み始め、駆逐艦は木っ端みじんに爆発していたり、原形をとどめていても、大火災が発生しており、沈没も時間の問題だった。

眼下の物音に気づくと、白い戦艦は更にロケットを発射した。

「や、やめろおお!!!!」

彼の叫び空しく、一瞬、まばゆい光の後、彼のいた艦隊は消滅した。

白い戦艦の艦内で帽子を被った艦長と思われる人物が合掌し、目を伏せた。

「米軍の将兵には申し訳の無いことをした。」

「仕方ありません。我々の艦を見られては困りますから。しかし、戦局に間に合っていれば・・・」

傍らの副官が艦長に言った。

「いや、この『まほろば』はあつてはならないものなのだ・・・我々は何んでもないものを作り上げてしまった。」

「はい。米軍のパイロットが一人漂流しています。どうしますか。」

副官が言った。

「彼には申し訳ないがこの艦の中に入れることは出来ない。運が良ければ救出されるだろう。何、彼一人が証言したところで、我々の存在が理解出来ようはずが無い。これより基地に帰投する。急速潜航。深度400。」

白い戦艦は海に没するとその姿を消した。以後、その戦艦が現れることはなかった。

その後運良く一命を救われたクリスは各所で証言したが、誰もその

非常識な話を理解出来るしようとする人物はいなかった。

いつしか、一種の怪奇現象として取り上げられるようになり、歴史の闇に埋もれていった。

そして、歴史は流れ60年後。新たな伝説が始まる・・・

戦艦「まほろば」スペック

全長：200メートル

全高：不明

機関：不明

最高速力：120ノット

武装：46cm砲 1門

対空、対艦ミサイル発射用VLS 142門（フロート含む）

20mm対空バルカン砲 12基

魚雷発射缶 20門（フロート含む）

最高可潜深度：1,500m

世界の趨勢

「まほろば」が姿を消し、戦争が終結して40年後、人類は未曾有の危機が襲来した。巨大生物の襲来である。1989年、東京に姿を出現したのを最初に、ニューヨーク、ロンドン、上海、パリ、リオデジャネイロ、サンフランシスコ、シドニーなど、世界の主要都市に出現、これらの都市を壊滅させ、犠牲者の数は数百万を超えた。中国では「神龍」、アメリカでは「ウォータードラゴン」、日本では「オロチ」と呼ばれた全長100メートルをはるかに超える巨大生物は、海より出現し、ミサイルも砲弾も通用しないこの生物は諸都市で暴虐の限りを尽くした。

常識の範疇で計り知れない生物を前に、人々は街が滅びるのをただ待つことしか出来なかった。

人類もまた手をこまねいていた訳ではなく、各国で専門のチームを創設し、研究、武器開発をそれぞれ始めていた。

日本では、1995年より特別予算が採択され、防衛省内に陸上、海上、航空自衛隊とは別に特殊戦術研究混成旅団、通称オロチ部隊が新設された。

武器開発も行われ、2000年に日本独自のステルス戦闘機「影電」、対地攻撃機「新星」が初飛行し、量産ベースに乗った。また、隠密性を重視した日本初の超電磁推進潜水艦「つくよみ」が就航、オロチ探索に乗り出していた。

しかし、どんな新兵器を作り出しても、オロチを撃退しうる有効打

にはならなかった。

フリーライター、広瀬千尋は朝の鋭い日差しに目を覚ました。彼のオフィス兼自宅は資料で溢れ、ベッドの傍らには「幻の白い戦艦は今！！？」と題された週刊誌がぞんざいに広がっていた。

突如携帯の着信音が鳴り、眠気まなこをこすりながらボタンを押した。

「もしもし・・・はあ、はあ、すみません。ですから、今度アメリカにですね・・・」

ぼさぼさの寝癖頭をかきむしり、彼は誰もいない空間にお辞儀をした。

「クリス・マッケンジー氏の取材のアポとってあるんで。今度はもっと詳しく聞いてこようと思っているんですよ・・・そんな眉唾話って・・・いや、俺はあの戦艦はいると確信してるんですよ・・・はい。わかりました。明日編集部に顔出しますんで、そのとき詳細を・・・はい。では！」

彼は電話を切った。

偶然アメリカでクリスと出会ったのが6年前、ニューヨークがオロチに襲われてすぐの取材だった。

クリスは「あのジャップの白い戦艦ならきつとあんなウオータードラゴンなんてたちどころに倒していただろう。」と漏らしていた。

クリスのただならぬ雰囲気を引きよせられ、彼はクリスに取材を申し込んだ。

クリスは千尋に自分がグラマンを操縦して遭遇した悪夢について話した。取材を重ねるうち、彼は確信した。白い戦艦は確かに存在すると。以来、彼は白い戦艦を追い続けているのだった。

胎動

「しかし、あの戦艦は・・・俺たちの常識を遥かに超えている・・・」

「

彼はベッドに身を委ね天井を仰いだ。クリスの話から察すると、白い戦艦は当時の技術水準を大きく上回っている。正確に機関部を撃ち抜く能力、一撃で巡洋艦を破壊する魚雷、そしてミサイル。一撃で艦隊を消滅させるほどの威力を有するのは核しか無い。しかし、その後の海域で放射能による被害は全くなかった。

おそらく現在の科学力でも、あの白い戦艦の技術力に追いついていないのかもしれない。彼はそのまま、まぶたを閉じ、眠りの世界におちていった。

次の日彼は出版社の編集部にいた。今後の取材の報告と記事の売り込みのためだった。

千尋と編集長は編集部の奥にある応接スペースにいた。騒がしい編集部の音が離れていた応接スペースにも伝わって来た。

「確かに、お前の記事は面白いし、読者も多少ついてる。だから誌面を割いてるわけだが、もういいだろう。部数も落ちて来たしな、お前にはやって欲しい仕事もあるんだ。」

編集長は言った。30代後半とまだ若いが、一国一城の主と言った風格を持った男だった。

「そんな。先輩・・・お願いします。もう少しこれを追いたいんです!!」

千尋は食い下がった。今年32歳の千尋と編集長とは編集社の先輩、後輩の間柄で、かれこれ10年の付き合いだった。千尋が編集社を辞めてからも彼は仕事を与えたり、何くれと無く面倒を見ていた。

編集長はため息をついて千尋の目を見て言った。

「わかった。アメリカ行き予算おろしてやる。だが、今度で最後だからな。」

「ありがとうございます！！先輩！！」

千尋の顔が一気に明るくなった。千尋は何度も編集長に頭を下げると、編集長は苦笑いし、手を振って応接スペースをあとにした。

同時刻、太平洋上を哨戒中の特殊戦術研究旅団所属の潜水艦「つくよみ」が海中の異変を察知した。

「つくよみ」は対オロチ対策の一環として開発された、新機軸の潜水艦であつた。その形状は各国のどの潜水艦とも異なっていた。台形状の扁平な構造、後方に張り出した潜舵を兼ねた安定翼、艦首にはソナーなどの各種センサーが装備されていた。また、超伝導電磁推進を実用潜水艦で初めて実用化し、70ノットの最高速度を誇っていた。

「艦長、水温の異常な上昇をキャッチしました。二時方向、深度500です。モニターに出します。」

水測員の早瀬一曹が言った。

「つくよみ」の発令所には大きなモニターが装備され、ここに各種の戦術情報が集約されて表示される仕組みになっていた。表示された情報を見て、艦長の松本二佐がうなつた。表示されたサーモグラフィの範囲が異常な早さで動いていた。

「これは明らかに生物だ。しかも早い・・・間違いない。奴らだ。本部に連絡。オロチ発見。本艦はこれより目標を追尾するとな。」

「つくよみ」は機関出力をあげ、オロチの追尾を始めた。

「つくよみ」スペック

全長：120 m

全幅：40 m

武装：対空、対艦ミサイルVLS32基

魚雷発射缶8基

各種ソナー、センサー装備

安全限界深度：800 m

最大速度：70ノット

機関：最高機密

深海の激闘

自衛隊特殊戦術研究旅団、通称オロチ部隊所属の最新鋭潜水艦「つくよみ」は発見したオロチの追尾を開始した。

水測員の早瀬一曹は目標の位置を正確に報告した。

「よし、このまま一定の距離を保ったまま追尾する。全艦物音をたてるな。」

最新鋭潜水艦「つくよみ」は情報収集能力と静粛性に特化した潜水艦である。船体表面は無反響タイル層に覆われ、電磁誘導推進を採用することで速度の上昇と、騒音の除去に貢献していた。

「つくよみ」は速度を50ノットまで増速し、オロチの追尾を行った。

艦長の松本二佐はオロチの生物としての能力に驚いていた。

「なんと言つ生物だ・・・こちらは50ノットを出しているというのに、まだ放されているとはな。まさに化け物だ。」

「現在、目標は潮岬南方、100キロを通過しました。このままのコースを行くと・・・」

水測員の早瀬一曹が今後の位置予測をディスプレイに表示させた。

「東京に上陸・・・か。直ちに位置情報を本部に送信。急げよ」

「つくよみ」によつて、予測された位置情報は、直ちにオロチ部隊本部のある防衛省市ヶ谷駐屯地地下司令室に送られた。

オロチ発見の報を受け、司令室では防衛大臣、自衛隊各隊の幕僚長以下自衛隊トップの面々が顔を揃えていた。

「なんということか・・・20年前の悲劇の再来とは・・・」

各幕僚長は頭を抱えていた。

「ともかく、住民の避難をさせねば・・・」

「しかし、オロチが来なかった場合はどうする？責任問題になるぞ・・・」

非常時になりかけている中で、消極的とも言える声がささやきあっていた。

「はいはい。もう。責任とか、あとでどうとでもなりますから、ちやつちやつやりましょう？責任とるのがお嫌なら、私がとりますんで。はい。」

明らかに緊張感の抜けた声が司令室に響いた。オロチ部隊司令官山根陸将補であつた。

「山根君。しかしね。」

「こうしてる間にも奴らくるかもしれないですよ。命令も出してもらわなきゃ、戦う準備も出来んでしょうが。ね。早く決めちゃってください。」

ショートボブの髪型にメガネ。嫌らしい坊ちゃんと言った感じの外見のこの若い将官がオロチ部隊のトップであった。外見と言動に似合わず、戦術指揮能力と戦略眼は防衛省でも随一の人材だった。

「わかった・・・しかし、山根君・・・」

「はい！命令出ました。これより、特殊戦術研究旅団は、直ちに首都圏防衛のため、展開いたします！」

上司の言うことを大声で遮った山根は司令部の各員にすぐさま指令を出していった。住民の避難、各地に分散配備した特殊戦術研究旅団の展開、全てが迅速に準備されていた。

そのころ、高速で東上するオロチを追尾した「つくよみ」はある異変を察知した。

「おかしい、目標の動きが止まりました。映像に出します。」

早瀬が言った。ディスプレイされた映像にはオロチが身体を丸めた映像が映し出された。

「何をしようって言うんだ・・・」

「つくよみ」の司令所にいる面々は、固唾をのんでその様子に見入った。オロチは口を開くと何かを叫んだようで、さらにその巨体を震わせた。

数秒もしないうち、大きな音が「つくよみ」にこだました。びくつと震わせたオロチは真っすぐ「つくよみ」に向かって来た。

「しまった！！アクティブソナーのつもりだったのか。増速し、爆雷散布。急げ！！」

松本は素早く命令すると、「つくよみ」その速度を最高速度まであげた。たちまちのうちに、「つくよみ」とオロチの差が広がっていった。

散布した爆雷に触れ、オロチの速度が止まる。かに見えたが、更に速度を上げ、オロチは「つくよみ」を追って来た。

「後部魚雷発射管、5番から8番、魚雷装填、タイミングに合わせて発射。」

松本はさらに魚雷の準備を命令した。「つくよみ」の装備する魚雷は、雷速70ノットを誇る高速ジェット魚雷である。速度、威力ともにこれを超える魚雷は日本に存在しなかった。

「発射！」

松本の号令とともに4本の魚雷が驚くべき早さでオロチに向かっていき、爆発した。

「つくよみ」は尚も速力70ノットを保ったまま、現場海域を離れていた。

「はあはあ・・・」

松本をはじめとした、「つくよみ」のクルーは死の恐怖に直面していた。最新鋭の潜水艦、最新鋭の魚雷。それが時間稼ぎの目くらま

しにしか使えないという無力感、そして、自分たちが乗っているのが人智を超えた化け物の前では、単なる棺桶に過ぎないと言う事実。

「つくよみ」にはもはや、オロチ追尾は不可能であった。

海上に浮上した「つくよみ」に司令部から通信が入って来た。

「大丈夫だったか。松本。」

相手は山根だった。

「もうしわけありません。我々は・・・オロチ追尾を続行出来ませんでした・・・」

悔しさと無力感で、松本は拳を握りしめた。

「ああ、いい。いい。大丈夫だ。気にするな。『つくよみ』が沈められ、お前さんが死ぬ方が遥かに手痛い損害だ。追尾は、現在、航空自衛隊に移行した。直ちに帰投するように。」

「つくよみ」の遙か前方で雄叫びをあげるオロチと、更に上空には百里基地所属のRF-4EJ-改が見えた。松本たちの闘いは惨敗に終わった。

「つくよみ」とRF-4EJ-改の報告を元に、目標の予想進路が東京にあると判明した。

特殊戦術研究旅団は直ちに戦闘準備を開始した。

伊豆半島沖海空戦

RF-4EJ改による幾度も偵察によって、目標の目的地が東京にあると判明した。

東京では陸自、警察による住民の避難を促していた。市ヶ谷駐屯地地下にある司令部では特殊戦術研究旅団長山根陸将補が住民の避難と特殊戦術研究旅団の展開の両方の陣頭指揮を執っていた。

「指令。住民の避難完了まであと5時間。」

オペレーターが山根に報告して来た。

「1,000万人からの人を避難させるんだ。それくらいかかるな。目標の方はどうだ？」

「現在、遠州灘を東に50ノット以上の高速で移動中です。」

司令部の大きなモニターにRF-4EJ改から撮影された映像が映し出されていた。

「まともに行ったら、間に合わないな・・・直ちに、各務原の影電と新星をあげる。そちらが一番近いはずだ。敵は一筋縄では行かない。燃料気化爆弾の使用を許可する。」

山根は時間稼ぎのために新型戦闘機、影電と対地攻撃機、新星を出撃させた。

影電は日本が新開発した最新鋭ステルスVTOL戦闘機である。ア

メリカのF-35をモデルに、戦闘能力、索敵能力を向上させた次世代の戦闘機であった。機体には衝撃に強い、耐熱カーボンナノファイバーが素材に採用され、軽さと丈夫さ、機動性では他国の戦闘機を凌駕していた。

新星は対オロチ対策として開発された新世代の対地攻撃機であった。最新のコンピュータが搭載され、日本のみならず、各国に装備されている、核を除くありとあらゆる武装を搭載することが出来た。武装には誘導爆弾、対地ミサイルを装備し、必要に応じて、60ミリ機関砲を翼下に取り付けることが出来た。

外見はアメリカのA-10Aサンダーボルトに似ていたが、その能力は遥かにそれを超えていた。

航空自衛隊、各務原基地に試験配備されていた影電、新星それぞれ、12機が飛び立った。

ちょうどその頃、RF-4EJ改は高速で東京に向かうオロチを上空から撮影し続けていた。

「くそ。どんどん、どんどん東京に近づいているって言うのに、俺たちには何も出来ないのかよ！」

パイロットの仲間二尉が毒づいた。

「こいつは偵察機だからな。見失わないように張り付いてるしか無い。」

後席の石橋二尉も悔しさをあらわにしていた。オロチは上空のRF-4EJ改には気にも留めず、ゆうゆうと海上を浮上し、100m

の巨体をあらわにさせて、沿岸約20キロをそうように東上していた。

もうすぐ伊豆半島にさしかかるかに見えたその時、影電が12機が飛来した。新星は最高速度が約900km、最高速度マッハ2.3の影電とはかなりの遅れが出てしまった。

「編隊全機、久しぶりの挨拶をぶちかますぞ。」

編隊長の桑原三佐が影電隊に指示を出した。影電の体内から、対地ミサイルが発射され、白い糸を引くように目標に向かってまっしぐら飛んでいった。

オロチは少しとまり、空を仰ぐような動きをした。そのとき、12発のミサイルが全てオロチに命中した。周囲は爆煙に包まれた。

「やったか!？」

桑原が声を上げた。爆煙の中から、ぬつとオロチの巨大な頭部が姿を現した。攻撃は全く聞いていなかったのだ。あとは新星が搭載した燃料気化爆弾を待つしか無い。

「攻撃続行!!」

再度ミサイル攻撃が開始された。今度は立て続けに各機二本ずつ、計24本のミサイルが発射された。爆発の瞬間、オロチは身を震わせ、金切り声のような鳴き声をあげた。ミサイルは、目標にたどり着く前に爆発した。

「なんだ!？」

映像を見ていた司令部は愕然とした、あれでは物理攻撃が通用しない。

「大丈夫なのかね？山根君！！？」

幹部が頼りなさそうな声を上げた。山根は余裕を含んだ笑みで言った。

「お任せください。」

余裕しゃくしゃくで表面は言ったものだが、山根は内心不安にかられていた。あの超音波防御の前では、爆撃ではダメージが与えられない。やはり目標を倒すには首都に配備したアレしかない。だが、市民の避難も、戦力の展開にも時間がかかる。ここは12機の影電と新星が頼りだった。

「隊長、残弾あと一発です。」

編隊列機が桑原に報告した。そんなことは自分の機体のモニターにも表示されてわかっていた。これまでか、と絶望的な感情が桑原を支配しかけたが突如通信が入って来た。

「桑原三佐、遅くなって済まない！直ちに現空域から離脱してくれ！！！」

新星隊長の森三佐からの通信だった。

森をはじめとする、新星隊はオロチにぎりぎりまで近づいて、虎の子の燃料気化爆弾を投下し、一気にフライパスした。

数瞬後、あたりはまばゆい光と劫火に包まれた。

決戦準備

「うおおおおおおお!!!」

新星編隊長の森は絶叫し、スロットルを限界まで振り絞っていた。

通常は上空から投下して威力を発揮する燃料気化爆弾であったが、目標には強力な周波バリアがある。敵の虚をつき、ダメージを与えるには、接近しての急降下爆撃、そして全速離脱しかなかった。燃料気化爆弾の被害半径は小さい。編隊全機が離脱に成功した。

「やったか・・・」

森は荒い息を吐いた。12機分の燃料気化爆弾の爆圧と高熱を食らったのだ。通常の生物なら生きていられないはずだ。だが、20発以上のミサイルをもともしない相手に効くのか。

森には爆発が収まるまでの数秒間が永遠のように思えた。

「う・・・嘘だろう・・・」

森は驚愕した。最新鋭の戦闘機と攻撃機が、艦隊を丸ごと消してしまふのと同じくらい強力な攻撃を加えているのに・・・尚も立っていられるとは。だが、バリアを張る時間はなかったのだろう。表皮は痛々しいほど焼けただれ、身体に至る所から鮮血が吹き出していた。

「やったぞ!!!」

司令部では幹部連中が奥のテーブルで肩をたたき、握手しあっていた。山根は内心その無責任極まる光景を掃き溜めでも見るかのようになまなざしで一瞬睨みつけると、すぐいつもの調子に戻った。

「あの～。お喜びのところ申し訳ないのですが、ただ、ヤツは足を止めたに過ぎませんよ。」

「何を言つとるんだね！山根君。どう見たって、死に損ないじゃないかね・・・あ・・・あ・・・」

得意そうに画面を指差した幹部の表情が青くなった。吹き出していた鮮血が止まり、かさぶたのようなものが出来上がっていた。

「どうあれ、時間が稼げたのは事実です。戦闘準備と住民の避難を急がなければなりません。」

「司令官、「いざなみ」から通信が入っています。」

特殊戦術研究旅団所属の大型輸送機「いざなみ」からだった。北海道に配備していた5式強襲戦車「轟雷」を運んで来たのだった。5式強襲戦車「轟雷」は特殊戦術研究旅団が独自開発した万能戦車で、ホバー装置を備え、従来の戦車ではなし得ない高速移動や、場所を選ばずに降下することも可能な、新機軸の戦車であった。

「よぉ！山根！ついに現れたってな。この日のための訓練。腕が鳴るぜ。」

戦車大隊指揮官の沼田二佐が愛車の中で豪快に笑っていた。

「ああ、わざわざ北海道から呼び寄せたかいがあったな。」

「んで？俺たちは、成田か？それとも羽田に降りるのか？時間はあまりないぞ。」

「ああ、それでさっきマップデータが送られて来たと思うが？」

「ああ、送られて来たが・・・」

「ここから降りてくれ。」

山根の突飛な一言に沼田はあぜんとなった。

「そんなこと聞いてないぞ！！」

ディスプレイにたつぷりつばをくつつけながら、絶叫にも似た抗議を遥か地下にいる司令官に送った。

「今言ったぞ・・・それに、『いざなみ』の各機長にも連絡済みだ。あ、ついでにお前の部下たちにもな。」

山根はウインクすると通信を切った。沼田は目が点になった。

「・・・おい、加藤・・・お前・・・知ってて言わなかったな・・・」

沼田機の砲手の加藤2曹は上官の恨めしいまなざしを見た。加藤はなるべく目を合わせないように言った。

「その・・・言ったら、減棒3年だと言われまして・・・」

「あの野郎・・・ふざけんなああああああ！！！！！！」

沼田が大声で絶叫する中、「いざなみ」は「轟雷」を射出していった。

「いやぁ・・・アイツをからかうのはこれだからやめられん。」

司令部で山根は一人ごちた。

東京上空を飛ぶ「いざなみ」編隊5機はそれぞれ5輦ずつ「轟雷」を射出した。

地表近くに達した「轟雷」は装備されたパラシュートを開き、落下速度を減速させると、目標となる効果地点へそれぞれ降下していった。

山根の戦闘準備はそれだけに終わらなかった。万一の場合に備え海上自衛隊に協力を要請し、P3-C哨戒機とSH60-Jをフル動員させ、東京湾に至るまでの沿岸海域にソノブイを投下させ、目標の位置を察知しやすくさせ、更に東京湾アクアラインを挟んで両側に最新鋭兵器を用意させた。

高出力長射程レーザー砲「瞬雷」である。ここを最終防衛ラインとして、さらに「轟雷」15輦、多数の地対地ミサイルを配備した。

だが、彼の撃退のための秘策はまだあった。

「現在のところ、我々の科学力、そして武力ではヤツにお手上げです。未来の科学がダメなら、過去の科学においでいただくことにしました。」

「まさか、アレを使うのかね？」

彼は、幹部たちにそう報告すると、モニターに小さく映る彼の奥の手を見た。住民が避難を終えつつある東京郊外であるものが組み立てられていた。

輸送機「いざなみ」スペック

全長：100m

全幅：120m

エンジン：「太陽」ターボファンエンジン8基

フルペイロード：250t

乗員：5名

航続距離：不明

特殊戦術研究旅団が開発した超大型輸送機。部隊を万全の状態で即座に展開出来るように一度に多くの装備を搭載可能にさせている。超大型の全翼機であり、ペイロードブロックを取り替えるだけで、早期警戒指令機、電子線機、爆撃機に用途を変えることが出来る多用途機でもある。

5式強襲戦車「轟雷」

全長：9.5 m

全幅：3 m

最高速度：毎時160 km（ホバー使用時）

武装：7.7 mmバルカン砲

140 mmライフル砲1門

日本が開発した最新鋭戦車。ホバー走行を可能にし、市街地戦で迅速な展開と移動が可能になった。また、従来の戦車よりも軽量化することで、輸送機からのパラシュート降下もできる多用途万能戦車。

決戦！

新星攻撃隊によってつけられたオロチの傷は、わずか2時間で治癒してしまつた。回復したオロチはその怒りに任せて東京に進もうとしていた。

「目標、移動を開始しました。東京まであと、3時間です。」

市ヶ谷駐屯地地下司令部でオペレーターが報告して来た。山根の全面の巨大モニターにはオロチの現在位置と予想進路がディスプレイされていた。山根が配置したソノブイによる警戒網が機能し始めたのだつた。

東京湾では海中戦力の配備が行われていた。木更津の東京湾アクアラインを防衛線とし、その内側におやしお型潜水艦2隻が配置され、外側には多くの機雷が敷設された。潜水艦2隻が浅い深度の海に配備されたのは、撃沈される可能性が高く、もしもの場合の救助が容易に行えるようにするためでもあつた。

上空ではSH-60が上空警戒し、外洋ではP3-C哨戒機がオロチを常にトレースし続けていた。

川崎側のレーザー戦車「瞬雷」1号車では砲手の矢島1曹が初陣に燃えていた。

「ぐふふ・・・燃えるぜ・・・ついにこの『瞬雷』の威力を見せつける時が来た!!!」

矢島は狭い車中で叫んだ。新型戦車の「瞬雷」はまだ3輛しか存在

しない。川崎側と海ほたるに一輛ずつが配備された。

「おい、矢島あ。もつと肩の力抜け。そんなんじゃせつかくの高出カレーザーも外してしまうぞ。」

「瞬雷」対指揮官の亀井三佐が言った。「瞬雷」の狭い車内は精密機械と計器とコンピュータの宝庫であった。ディスプレイには作戦開始時刻のカウントダウンが表示されていた。

「大丈夫です！俺が、この必殺のレーザーでヤツを倒してみせますよ。」

血の気の多い部下に亀井は深いため息をついた。

特殊戦術研究旅団が戦闘準備を終えつつあるとき、千尋は東京から出ようとしていた。編集部にいたときに偶然避難命令を受け、編集長の車に同乗していたのだ。

「20年ぶりの襲来か・・・あの時は本当にひどかったな・・・」

自衛隊や警察に誘導されていく避難民を見ながら、編集長は言った。

「ええ、あのとき、俺は記者になろうと思ったんです。今日の前にある惨状を誰かに伝えたい。そしてその先にある真実を知りたい。そう思って・・・」

逃げる住民、最新鋭の兵器群、そしてオロチ。千尋の中である勘が働いた。

「先輩、すみません！！やっぱり俺、戻ります！！！」

そう言うのと、千尋は編集長の車を飛び出し、偶然通りかかった原付を止めた。

「わるい、これを俺に貸してくれ。代わりに、あの車に乗っていいから！！」

そういつて、原付の若者からヘルメットと原付を借りると、逃げて来た道を逆走していった。

「あ、おい！千尋！！」

編集長は群衆の中に消えていく後輩の姿をなす術もなく見送った。

一方司令部では、対オロチの戦闘準備の9割が終了していた。だが、敵はもう間近に迫っていた。

「目標、現在浦賀水道を北上中、あと10分で、作戦海域に入ります。」

「司令。住民の避難、完了しました。」

住民の避難完了の報告に山根は安堵した。

「間に合ったか！アレはどうだ！？」

「こちら、荒川河川敷。8式自走砲、あと30分待つてくれ！30分で撃てるようにしてやる！！！」

特殊戦術研究旅団第一技術班班長の米沢二尉が言った。モニター越しでも彼は部下たちに檄を飛ばし、突貫作業で仕事をしているのがわかった。

30分・・・もつのか・・・敵は東京湾に入っているのに。もたせて欲しいと山根は願うしかなかった。山根はマイクを借りると作戦に参加する全将兵に訓示した。

「諸君。もうすぐ敵がやってくる。正直手強い。勝てる見込みは少ないが、倒さなければならぬ。我々は全てを尽くしてヤツを倒す。各員一層奮励努力せよ。」

作戦に参加した将兵は一同士気に満ちあふれた。それは山根の下手な演説故にはない。自分たちの義務感とプロ意識が触発されたからだ。自分の全霊をかけて敵を倒す。そんな意志に満ちあふれていた。

矢島はゴーグルを付け直し、照準機にかぶりついた。

山根の訓示が終わって、3分後突如海面が爆発した。目標が機雷群にかかったのだ。この機雷群はオロチの接触と同時に他に仕掛けられた機雷も一度に爆発する仕掛けにしてあった。

爆圧に負けて、オロチは海面に姿を現した。

「攻撃開始!!!」

山根の号令のもとに一気に攻撃が開始された。

木更津、川崎沿岸に配備された地对地ミサイルが一拳に発射された。爆煙があたりを包んだ。しかし、「瞬雷」と「轟雷」に搭載された高精度赤外線センサーがオロチの姿を捉えていた。

「撃てえ!!!」

「瞬雷」指揮官の亀井、「轟雷」指揮官の沼田が同時に叫んだ。「瞬雷」から赤い一筋の光が放たれた。レーザーならば、オロチの周波バリアの干渉を受けることなく貫くことが出来る。「瞬雷」は最大出力でオロチめがけてレーザーを照射した。

「轟雷」の射程距離は4000m。オロチに砲弾が届くギリギリであつたが、140mmライフル砲を連発した。現行の戦車より貫通力、命中精度に優れた「轟雷」は砲弾の雨をオロチに降らせた。

「攻撃中止。」

爆煙のため周囲が見えない状況のため、一時攻撃が中止された。砲弾とミサイルとレーザー射撃の洗礼を受け、生きているのだろうか。一同は固唾をのんで待った。

爆煙が晴れたとき、作戦に参加したもののたちの絶望はぬぐい去れないものだつた。

何事もなかったかのようにオロチが悠然と立っているのである。

「馬鹿・・・な。」

司令部の幹部の一人が椅子から転げ落ちた。

「ふざけるなあああ!!!」

川崎側の「瞬雷」矢島一曹がレーザーを発射した。

レーザーは、オロチの表面の極小さな面積を焼いたに過ぎなかった。

「まだまだ!!」

新星6機編隊が急降下爆撃をかけた。いや、かけようとした。オロチは口を開け、上を向いた。オロチの口から、光のようなものが飛び出すと、新星6機が爆散した。

次にオロチは巨体を震わすと、大きなうなり声にも似た声を出した。

「まずい!!全隊、退避・・・!!!」

山根は叫ぼうとしたが、叫ぶ前にその衝撃波が攻撃部隊全てに襲いかかった。その凄まじい衝撃波は「瞬雷」をはじき飛ばし、「轟雷」を転覆させ、魚雷攻撃をかけるべく低空飛行していたSH-60編隊を海面に叩き付け、MLRSを爆発させた。

「・・・」

しばらくの間、司令部では誰も音を発しなかった。

「生存者をまとめて退却・・・急げ。」

山根もそれ以上は言わなかった。オロチが東京に上陸するのは時間の問題であった。ちょうどそのとき、荒川から知らせが入った。

「司令。8式自走砲。準備完了だ!いつでも行けるぜ。」

米沢が息を弾ませながら言った。それは、山根が最も待っていた瞬間だった。

「これが、最後の決戦だ・・・」

ついに、オロチ部隊最後の決戦が始まる。

小笠原諸島遙か南の孤島。その地下である艦が目覚めようとしていた。

廊下を軍靴の音を響かせて白い軍服の男が歩いていた。とある部屋の前に立ち止まると、彼は持っていたカードキーをリーダーに差し込んだ。

扉が開くと、そこにはたくさんのコンピュータや計器に囲まれた部屋があった。白衣を着た科学者と思われるものたちが忙しく動き回っていた。

前方には大きなガラスが張られており、外の様子が見ることが出来た。彼は、白衣の中に一人だけ混じった軍服の男に話しかけた。

「艦長。ヤツが現れました。東京に配備された攻撃部隊は全滅と、エージェントから報告が入っています。」

「艦長」と呼ばれた男はまだ若く、30代に見えた。艦長は静かに目を閉じていった。

「そうか・・・この完成まで待つて欲しかったのだな。主機関の稼働試験が成功次第、『まほろば』を出撃させる。」

艦長は一步前に出て、ガラス越しにあるものを見下ろした。
そこには数多くのケイブルにつながれた、白銀に輝く戦艦の姿があった。

60年の歳月を経て、伝説がついによりみができる。

レーザー戦車「瞬雷」スペック

全長：25 m

全幅：6 m

武装：7・7 mmバルカン砲

高出力フッ化重水素レーザー砲 1門

乗員：3名

驚愕 8式自走砲！！

木更津の東京湾アクアライン最終防衛線を苦もなく突破したオロチは何事もなかったかのように海ほたるを通過していった。

オロチが引き起こした衝撃波により海ほたるは廃墟と化していた。海ほたる側の攻撃指揮官、「轟雷」隊長沼田二佐は天地逆になった愛車の中で目を覚ました。

「・・・う・・・い、痛え・・・腕が折れてやがる・・・加藤・・・生きているか？」

沼田は下にいる砲手の加藤二曹を見た。加藤はうめき声を上げていたが沼田よりは軽傷のようだった。

「か、体中が痛いです。・・・隊長。」

「それだけ減らず口が叩けりゃ元気だ。俺たちに来ることは、救助を待つくらいだな・・・ちくしょう・・・化け物が・・・」

電源が切れ、真っ暗になった車中で沼田は悔しがった。最新型の戦車もレーザーもヤツには通用しない。もう、8式自走砲に希望を託すしかなかった。

「山根・・・頼んだぞ・・・」

司令部では特殊戦術研究旅団司令官の山根陸将補が指揮に追われていた。ついに最終決戦が近づいたのだ。

「おやしお級は目標には一切手を出すな。申し訳ないが、足手まといだ。それより、S H - 60 隊の救助にあたってくれ。」

おやしお級の艦長たちも最初は命令に背こうと考えたが、圧倒的な力の前になす術もないことを悟った。2 隻は浮上してS H - 60 隊の救助に向かったが、オロチは2 隻を意に介すこともなく冷然と無視して通り過ぎた。

「野郎・・・俺たちは眼中に無しかよ!!」

セイルで、副長の江島三佐が言った。艦長の堂本二佐は隣で唇を噛みながらその事実を受け止めていた。

その頃、司令部では完成なった、8 式自走砲がモニターに映し出されていた。

「これが、あの・・・8 式自走砲かね？」

幹部がその巨大さに嘆息した。

「はい。坊津沖に沈没した戦艦大和よりサルベージした46cm 砲を我々が研究、そして新規に開発した、自衛隊史上最大にして最強の自走砲です。」

8 式自走砲。正式名称は8 式46cm 自走砲である。全長約35m、主砲は50口径46cm ライフル砲。各部に砲撃に耐えうる対衝撃波装甲を施してある圧倒的な防御力と攻撃力を備えた戦車であった。有効射程は45km。東京郊外から、目標を狙い撃ちする作戦であ

る。

「現在のところ、オロチの周波バリアの前では、ミサイルなどの衝撃によって敵を破壊する兵器は無力です。目標を倒すには極超音速で飛来する撤甲弾による砲撃しか、我々には攻撃手段はありません。」

居並ぶ幹部たちの前で毅然と山根は言い放った。

そのころ、8式自走砲の中では射撃調整と発射準備が行われていた。

「目標現在位置を確認、砲身斜度調整開始。」

「主砲弾、装填。」

「目標、上陸します。」

ついに、オロチが東京に上陸した。

その頃、2輦の「轟雷」が、オロチと距離をとるように挟み込みこんで、レーザーを照射した。「轟雷」による攻撃のためではない。8式自走砲の照準を「轟雷」の照準と合わせることでより正確にさせるためであった。

「よっしゃ、オロチめ！とらえたでえ！！！！」

「轟雷」車長の近藤一尉が関西なまりを丸出しにして叫んだ。

「発砲諸元、誘導砲弾に入力完了。砲撃準備完了！」

8式自走砲のオペレーターが司令部に報告した。

「撃てえ！！！！」

山根は即座に砲撃命令を下した。砲弾が轟音とともに8式自走砲から放たれた。衝撃波で、あたりに配置された自衛隊の車両は吹き飛ばされた。8式自走砲の車内にも衝撃は伝わり、大きく揺れていた。

「これが、46cm砲か・・・」

米沢二尉が絞り出すように言った。米沢二尉はこの年、54歳。ずっと整備畑で働いて来た。このまま、准尉で退官と思っていた矢先、以前から知己のあった山根に二階級特進で特殊戦術研究旅団に整備班長として引き抜かれた。彼の30年以上にも渡るキャリアの中で、46cm砲は恐らく最大にして最後、そして最強のものであるだろう。あまりに規格外の代物を扱ってしまったと、嬉しい反面恐ろしいという気持ちで今の状況を見つめていた。

「主砲弾、コントロールを離れます。ユー・ハブ・コントロール！」

主砲弾に搭載された誘導装置は8式自走砲のコントロール下にあったが、着弾直前、より命中精度を上げるために、「轟雷」にコントロールを引き渡す必要があった。

「おっしやあ！！！！アイ・ハブ・コントロール！！往生せい！！！！化け物おお！！！！」

近藤は叫び、レーザーをオロチに向け続けた。オロチが金切り音に振り向き、上を向いた瞬間、46cm主砲弾が命中した。

オロチは首の肉を大きくえぐられ、その場で崩れ落ちた。

誰もいないゴーストタウンと化した東京を千尋は原付で走り抜けていた。都心部は危険だと考えたが、危険を冒さなくては良いネタは仕入れられない。千尋はそのまま都心に向けて原付を走らせた。

オロチが迫っている。死ぬかもしれない。だが、もしかしたら俺の求めていた白い戦艦が見えるかもしれない。千尋は何とも言えぬ高揚感に支配されていた。気がつく都庁の屋上に立っていた。

千尋はファインダーを向けた。眼前には沿岸部の炎が見えた。自衛隊の車両が炎上している。次にオロチにカメラを向けた瞬間、オロチが首から血を出して倒れ、そのあとで大きな爆音が聞こえた。千尋は崩れ行くオロチの姿を夢中で撮っていた。

オロチを仕留めた「轟雷」車長、近藤一尉は信じられない光景を目にしていた。

「ヤツが・・・まだ生きてる!!」

驚愕8式自走砲!! (後書き)

奥の手、46センチ砲の登場です。

46センチ砲の下りはある漫画をモチーフにして書いてみました。

絶望。そして

「おい。なんでや・・・なんで首の肉吹っ飛ばされて生きとんのや・・・」

近藤は恐れおののいていた。オロチは爬虫類のような切れ長の鋭い眼で近藤の「轟雷」を睨みつけていた。まるで、自分を傷つけた相手を恨むかのように。

その様子は近藤の車載スピーカーを通じて、市ヶ谷駐屯地地下総司令部に伝えられた。

「次弾装填！！」

すかさず、山根が8式自走砲に命令を下した。8式自走砲内のオペレーターたちが慌ただしく自分たちに割り当てられたコンソールパネルで作業にあたっていた。

「了解。次弾装填。自動装填装置作動。装弾開始。」

「砲心冷却開始。冷却終了まであと90秒。」

「発砲諸元入力開始、現在座標、誤差修正・・・『轟雷』12号車。近藤一尉応答せよ。」

「現在位置・・・お、おいやべえぞ・・・こりゃ。ヤツが動き出しゃがった。」

オロチが巨体をぬうつと起き上がらせた。近藤の「轟雷」に目標を定めると、一気にその巨体で襲いかかって来た。

「あかん。戸村!!」

「ホバー開始!!」

運転を担当する、戸村二尉が「轟雷」を浮き上がらせた。市街地戦を想定に入れて開発された「轟雷」はホバー走行を行うことが出来る。空中からの降下時のスラスターとして利用することも可能であったが、本来は市街地の障害物を突破し、迅速に移動するためのものだった。時速160kmという、通常の戦車の倍以上のスピードで「轟雷」はオロチから逃げ出した。

オロチもその巨体に似合わぬスピードで「轟雷」を追尾した。その時速はほぼ100kmに達している。近藤たちの「轟雷」はホバー走行の小回りのよさを活かして、辛くも脱出することに成功したが、レーザー追尾は不可能であった。

もう一輛の「轟雷」がオロチをレーザー追尾していたが、もう一輛いないと正確な位置は報告出来ない。

他の「轟雷」はオロチの付近にはいない。万事休すかに思われたが、オロチの真正面にレーザービームが照射された。近藤の「轟雷」が帰って来たのだ。

「ヒーローってのはなあ、悪者から逃げないもんや!」

近藤は叫んだ。

「すまんなあ、戸村。お前を巻き込んだじまつて。」

近藤は下の席にいる戸村二尉に謝った。戸村はクールに笑って言った。

「そんなもの謝ったうちに入りませんよ。近藤さん。くじ運の悪さもここまで来たら最高ですからね。そのかわり、生きて帰ったら、A定食大盛り、驕ってもらいますよ。」

「・・・お前・・・案外安いな・・・」

8式自走砲では発射準備が整っていた。

「発射準備完了!」

「第2射。撃てえ!!」

8式自走砲から、46cm砲弾が発射された。極超音速で目標に飛来する最強の砲弾は回避不可能な一撃であった。今度こそオロチを仕留める。かに見えた。

オロチは素早く砲弾の方向に向くと、光弾を発射した。空中で46cm砲弾が爆発した。

「う・・・嘘だろ・・・」

それが近藤の口にした最後の言葉だった。次の瞬間、オロチは身体を震わせ、猛烈な衝撃波を周囲に浴びせた。近藤の「轟雷」はビルの下敷きになり爆発し、もう一輛の「轟雷」も衝撃に耐えられず爆

発した。

その衝撃波は離れた新宿にも伝わって来た。

「うわぁー!!」

千尋は急いで都庁ビルの中に入った。ビリビリと衝撃が伝わり、激しくビルが揺れていた。衝撃が収まったあと、千尋は屋上にでた。そこには紅蓮に燃える臨海副都心と、オロチの姿があった。望遠レンズ越しに見たその姿は、牙をむき出しにし、鮮血に彩られた真っ赤で禍々しい姿であった。

遠く離れているのに、まだ、安全なはずなのに、千尋は恐怖心で動けなくなった。膝は震え、唇は渴き、死が眼前に迫っていることを実感させられた。

臨海副都心炎上、46cm砲弾迎撃無力化。山根は拳をコンソールに叩き付けた。

「くそ・・・」

「山根君。す、すぐに次弾装填したまえ！」

幹部の一人が叫んだ。

「46cm砲弾はあと一発しかありません。実用化されたとはいえ、まだ砲弾の生産が追いついていないのです。昨日までで生産出来たのはわずか3発のみでした。目標が迎撃出来る以上、最後の砲弾も

無力化されてしまう公算は大きい。」

山根は齒噛みした。そんなとき、8式自走砲の米沢から通信が入って来た。

「おいおい。いつから弱音吐くようになったんだ？坊主。俺んとこにいた時はもっとマシな台詞はいていたぜ。」

「おやっさん……」

「山根。俺が整備した8式自走砲は完璧だ。照準誤差も全く無え。次はヤツを仕留めてやる。お前ももっと部下を信じろ。」

音声だけの通信だったが、米沢が笑っているように思えた。

「司令。俺たちもまだ暴れたりませんよ。出し惜しみは困ります。」

影電隊長の桑原が言った。

「司令。こちらもうつぶんがたまっているのね。攻撃許可を願います。」

やえしお艦長の堂本二佐も言った。山根はしばらく目をつむった。作戦を考える時の山根の癖である。

「30秒で勝負をつける。影電隊はこちらのタイミングに合わせ、空対地ミサイル全弾を目標に発射。一気に目標をフライパスせよ。やえしおは全管にハーブーンを装填、タイミングは追って指示する。オロチの動きが止まった瞬間が勝負だ。8式自走砲の発射タイミン
グはおやっさん。あんたに預ける。遠慮なくぶっ放せ。」

「良いのか？俺は整備屋だぜ。」

「おやつさんは8式自走砲を知り尽くしてる。この中で一番早く、かつ正確に目標を狙えるのはおやつさんしかない。」

「嬉しくて涙が出るぜ。わかった、まかされたぜ。お前は椅子にふんぞり返って待ってる。」

米沢が通信を切った。司令部では、オペレーターたちがミサイルを同時に着弾出来るタイミングと座標を計算していた。瞬く間に座標と発射タイミングが計算され、影電、やえしおに転送された。

「作戦開始！」

山根が命令を下した。命令一下、影電が急旋回し、ミサイルの全弾を発射した。

「全管発射！！」

堂本がハーブーンを発射させた。ミサイルがオロチを取り巻くように急速接近した。オロチは身を震わせると周波バリアを展開し、ミサイルを爆発させた。だが、それは山根と米沢の計算通りであった。

「撃てえ！！」

米沢が絶妙のタイミングで8式自走砲の最後の砲弾を発射した。オロチは周波バリアを展開する瞬間、身体の動きが止まる。この瞬間こそがもつとも、砲弾に関して無防備な瞬間であった。

爆煙の中で、46cm砲弾の轟音がこだましていた。

目覚めるとき

爆煙が晴れたとき、司令部の一同は崩れ落ちた。

オロチは46cm砲弾を口で受け止めていた。一度目は効いたが、二度目は迎撃され、三度目の起死回生の作戦も水泡に帰した。山根にはオロチが笑ったように見えた。オロチは口で受け止めた砲弾を一気に噛み砕き、光弾を8式自走砲に発射した。

「回避!!」

米沢の判断で直撃は免れたが、衝撃で8式自走砲は横転し、大破した。

「み、皆・・・生きてるか・・・」

横転した8式自走砲の中で、自分の傷に構わずに米沢は車内を案じた。車内の乗員は言葉にならないうめき声を上げていた。非常バツテリーが機能し、赤いランプがついていた。乗員たちは重傷であったが、なんとか全員生きていると言った感じであった。

米沢の傷は右腕と左足の骨折そして、肋骨が3本折れていた。それでもなんとか意識を保ち、司令部へ連絡を取り続けていた。

「もう・・・打つ手は無い・・・」

山根は言った。司令部の一同すべてが真っ赤に燃える炎熱地獄と化した臨海副都心をただ傍観していた。全ての攻撃手段が通用せず、唯一の頼みであった8式自走砲が大破し、最早攻撃は不可能だった。

オロチはさらに歩をすすめ、内陸に移動を開始した。

時間をさかのぼること45分前、特殊戦術研究旅団とオロチが激戦を繰り広げているとき、小笠原諸島南方の孤島の地下秘密基地ではある試験が行われていた。「まほろば」の主機関起動実験である。

「いよいよ。この時が来たか・・・これで、『まほろば』の真の力が発揮される。」

艦長の敷島昇はまほろばの姿を見ながら言った。

「そうだ・・・俺たちが100年がかりで作上げた最高の戦艦の真の力がな。」

艦長の隣で年若い白衣の男が言った。

「これはお前の功績だよ。千早博士。」

「まほろば」の設計者、千早信仁博士である。現在の「まほろば」のほぼ全てを設計し作り上げた、人類最高の科学者の一人だった。

「買いかぶり過ぎだ。俺は単にまほろばの武装を作ったに過ぎない。『まほろば』の基本設計を作り上げたのは爺さん、主機関の基礎理論を確立したのは親父のチームだ。」

千早家はまさに天才科学者の家系で、信仁の父も、祖父も今も現役で「まほろば」の建造に携わっていた。

千早家をはじめとして、居並ぶ科学者たちがコンソールに向かい、各々の作業を行っていた。

「補機球形直列水素核融合炉に接続開始。S機開始動。」

「機開始動。各部オールグリーン。順調に出力上昇中、現在30%。40、50、60%・・・」

突如、警告音が鳴った。

「出力、急激にダウン！現在、30%！なおも低下中！」

「なんだと！！」

信仁は驚いた。万全に万全を重ねたこの実験である。失敗は許されなかったし、急激な出力低下は彼の想像外であった。信仁も、信仁の父も、祖父もすぐにコンソールにかじりついて事態の解決に移った。だが、千早家の頭脳を総結集しても事態は解決に至らなかった。

昇はまほろばを見て叫んだ。

「何をしている。今お前が目覚めねば世界が、人類が滅びる。今こそ目覚めろ！『まほろば』！！！」

昇の目には一瞬、艦が光り輝いたように見えた。

「出力戻っていきます！40、45、50、60、70、80%！さらに上昇中！！」

「『まほろば』・・・」

まほろばに礼を言うように、昇は目を閉じた。

「現在、出力100%。艦隊各部、機関部に異常なし。実験成功です！」

オペレーターは歓喜の声をあげた。あたりから歓声がわき出した。全てのチェックを終えた信仁が昇の元にやってきて、肩を置いた。

「これで、『まほろば』は大丈夫だ。思い切って暴れてこい。」

「ああ！」

昇は帽子をかぶると制御室を出て行った。「まほろば」に乗り込んだ昇はブリッジクルーを見渡して言った。

「諸君。長い間、待たせたな。これより本艦は出撃し、敵巨大生命体を撃破する。『まほろば』発進準備。」

昇の命令以下、ブリッジクルーが忙しく動き始めた。

「主機関、順調に機動中。現在、出力95%。」

「兵装システムオールグリーン。全て異常なし」

「メインゲートオープン。」

「まほろば」の格納庫の扉が開いた。大きな空間が姿を現した。「まほろば」がその空間に入ると、ゲートの扉が閉じた。

「第一発進口、注水開始。現在レベル1。レベル2……」

瞬く間に海水が空間に満たされていった。海水が満たされると、外界との扉が開いた。

「『まほろば』発進！！」

ついに60年の期間を経て、「まほろば」がその姿を現した。「まほろば」はその速力をあげつつ海面に向かっていった。

「現在速度上昇中。速力、50ノット、70、90、100、120、140ノット。離水速度に達します。深度、現在40メートル。間もなく海水面に達します。」

「浮上と同時に、反重力リフト作動。巡航モードで飛翔開始！」

昇は指令を下した。眼前には海水面が見えて来た。

「飛べ！！『まほろば』！！！」

「まほろば」の白く美しい艦体が海を貫き、空に飛び出した。60年前の姿とは全く違った姿がそこにはあった。主砲は三連装2基、より大きくなった推進部。よりシャープになった艦体。流線型ではなくより無骨なくさびのような形にその姿を変えていた。

「スーパーラムジェットエンジン始動。進路を東京にとれ。我々M機関、60年ぶりの出撃だ！」

青白い光がエンジンから出た瞬間、凄まじいスピードで「まほろば」は空に消えた。

「まほろば」2008年仕様スペック

全長：250m

全高：100m（巡航モード）／120m（戦闘モード）

機関：主機 S機関 補機 球形直列水素核融合炉

最高速度：160ノット（海中）マッハ3.2（空中）

武装：51cmレールガン 3連装2基6門

対空、対艦ミサイル発射用VLS 108門

30mm対空レーザー砲 連装12基 24門

魚雷発射缶 24門

艦首反射式硬X線レーザー砲 1門

その他 武装最高機密

搭載機：無人戦闘機 零式桜花11型 3機

最高可潜深度：5,000m

60年前に姿を消したまほろばの生まれ変わった姿。主機関に未知のエネルギー機関、S機関を採用し、以前の「まほろば」の100倍近いパワーを誇っている。

武装の性能も格段に向上し、まさにオーバーテクノロジーの産物と言ってよい。

空中機動の関係上、以前あったフロートは排除され、代わりに反重力飛翔翼を装備し、戦う場所を選ばない万能の戦艦として進化を遂げた。

ここにあげた性能はまだ一部で、まだ知られていない武装もあると言っ

出現！「まほろば」

「まほろば」は小笠原諸島上空をマッハ2.5で通過していた。

昇は艦橋にひと際高く設置された指揮シートに腰掛け、めまぐるしく変わる空を見つめていた。空中、海中での高機動戦闘を主眼において設計された「まほろば」の艦内は乗員は常にシートに座れるようになっており、艦橋には全天周モニターが設置され、外の景色から戦闘情報、通信まで集約される仕組みになっていた。

昇の眼前には、M機関が秘密裏に打ち上げた監視衛星からもたらされた東京の映像が映し出されていた。オロチの光弾がきらめく度、あたりに大爆発が起こっていた。

「現地に派遣したエージェントによると、周辺の住民の避難は完了しているそうです。艦長。」

昇のとなりのシートに腰掛けた「まほろば」副長の真田誠が言った。まだ、26歳と若いが生粋のM機関の人間であった。

M機関とは、前「まほろば」艦長、故三好義安大佐が日本より離反して作り上げた秘密機関である。63年前、昭和20年8月15日、「まほろば」の科学力を恐れた三好大佐が日本の無条件降伏を機に「まほろば」とそのクルー、そして「まほろば」基地の人員とともに日本国より離脱、以後、どこの国にも属さぬ秘密機関として世界の脅威になるべきものと戦うためにその技術を磨いていった。

以後は小笠原諸島南端の孤島の地下にこもり、そのコミュニティの中で世代交代を繰り返していった。

しかし、敷島昇は違った。15年前、サブマリナーとして小笠原諸島近海で任務活動中、乗艦がオロチとの偶発的な戦闘で撃沈され、漂流したところを助けられたのだった。このように、助けられた漂流者が機関員となるケースも少なからず存在した。

「だが、火の海になった東京は繰り返したくはなかった。」

昇は拳を握りしめた。20年前、東京にオロチが来襲したとき、昇は恋人と家族を失っていたのだった。そのことを聞いていた誠は、怒りと悲しみに震える艦長をただ見守るしか出来なかった。

「東京湾に入る前に減速、巡航最低速度で目標に接近する。」

昇は事前に命令を下した。高速で東京に突入する「まほろば」はほんの少しタイミングを間違っただけで攻撃のチャンスを逸してしまうからだ。

東京は火の海だった。浅草も、神田も、秋葉原も上野も、六本木も、全域が火の海だった。消火させようにも人間そのものがないゴーストタウンである。火の回りに任せるしか無かった。

「司令、負傷者の搬送終了しました。」

「都内の残存『轟雷』、『瞬雷』の撤収に成功しました。現在、百里基地へ向かっています。」

オペレーターが少しだけ安堵の息をもらした。彼らに出来ることは全て終わったのだ。

「そうか・・・よくやった。」

山根がねぎらいの言葉をかけたが、一瞬自嘲的な笑いがこみ上げて来た。なにがよくやったというのか結局は人智を超えた力に完敗したのだ。山根は敗北感と罪悪感でいっぱいになっていた。

そんな中、米沢から通信が入った。

「坊主・・・すまねえ。力及ばなくてよ。」

「おやつさんが生きていただけで良かった。おやつさんが死んだら怒られがいのある人がこの世からいなくなりますからね。」

少しだけ山根は笑った。これが山根に出来る精一杯の冗談だった。そんな山根を良く知る米沢はそれを察し、自分の傷をおして破顔した。

「こきやあがれ！今度そっちに行くからな。ここまでぼろ負けしやがって。百たたきだ。」

顔面蒼白になりながら笑った米沢は表情を悟られないようにすぐに映像による通信を切った。オペレーターからいきなりの報告が入った。

「P-3Cより入電！東京湾を急速に北上する未確認飛行物体あり！レーダーには反応ありません。」

「なんだって!？」

オロチは新宿に歩みを進めていた。といってもオロチに足は無い。

巨大な龍と考えると差し支えない。空の飛べないこの龍は蛇のように身をくねらせて、都庁ビルまで近づいて来た。市ヶ谷地下司令部とはことなり、都庁はむき身のビルディングだった。オロチの攻撃に対してあきらかに脆弱な代物であった。

千尋は動かなかった。いや、動けなかった。目の前に自分の死をもたらすものがやってこようとしている。俺は死ぬのか。一秒にその考えが千尋の中で何十回も繰り返された。だが、生へ結びつこうとする動きとは裏腹に、千尋はカメラを向け続けた。真正面から迫り来る禍々しい化け物の姿を、千尋は死の恐怖を忘れながらほぼ無意識のうちにシャッターを切り続けていた。

そんな自分を唯一攻撃する者と認めたのか、オロチは口を開いた。千尋は光弾のエネルギーがたまっていく様を見た。オロチと千尋の距離、わずか200m。すぐにあの世に行ける。死んだと思った瞬間、オロチは横に崩れ落ちた。ミサイルがオロチの頭にぶち当たったのだ。

「どうしたんだ!!?」

「あれはなんだ!!?」

司令部の山根と、千尋が同時に叫んだ。だが、千尋は山根よりもよく知っていたはずだった。その白い戦艦を。60年の歳月を超え、白銀の戦艦が姿を現したのだった。

「さあ、ここからは我々が相手だ!」

「まほろば」とオロチ。人智を超えた闘いが始まるうとしていた。

その名は桜花

「全艦、第二次攻撃準備。グランドクルスを使う。」

昇は命令しようとしたが、副長の誠がとめた。

「待つてください。艦長、都庁に人が!!」

全天周モニターにカメラを抱えた千尋が映し出された。

「なんだと・・・避難は完了したんじゃないのか。やむを得ない。救助するしか無い・・・桜花!!」

モニターの画面に女性の姿が映し出された。髪の高い美しい十二単を着た女性だった。

「はい。艦長。」

「出られるか？」

桜花と呼ばれたそれは優しく微笑むと言った。

「お任せください。都庁ビルにいる人を救助すればよろしいのですね？」

「そうだ。よろしく頼む。」

「はい。」

桜花は恭しく頭を下げるとモニターを切った。すぐに「まほろば」の艦橋後部に設置されたカタパルトが開き、小さな戦闘機が射出された。無人戦闘機零式桜花ⅠⅠ型である。無人戦闘機である桜花は、たちまちのうちに最高速に達し、都庁の上空にたどり着いた。

「あれが・・・白い戦艦・・・」

千尋があつけにとられていると、いつの間にか目の前に小さな見たことのない戦闘機が着陸した。

「お乗りください。ここは危険です。」

戦闘機はそう喋ると、ハッチを開いた。千尋は状況が飲み込めぬまま、桜花に乗り込んだ。桜花は千尋を飲み込むと、すぐに空域から離脱した。

「なんだ？誰もいないじゃないか。」

操縦席に座ったのは良いものの、狭い戦闘機の中には誰もいなかった。すると戦闘機の中から女の声が聞こえた。

「はい・・・この戦闘機は無人機ですから。」

「せ、戦闘機が喋った！？しかも、女？」

千尋は驚いた。よくよく見ると、操縦席には操縦桿や計器は無く、モニターとキーボードらしきものしか見当たらなかった。モニターには十二単を着た女性が映し出された。

「私は桜花。この戦闘機を制御している人工知能です。」

機械らしさとは無縁の美しく、流麗な声で桜花は話した。千尋にとつては人工知能と言うSFじみたものが存在することも信じられなかったが、人間と会話する桜花の存在も信じられなかった。モニターの桜花はその様子を見たのか、少し悲しげな表情をして千尋に言った。

「私達はあなた方とは遥か隔絶した科学技術を持っています。そのような反応も致し方ないと思います。」

「すまない、桜花さん。あまりのことで驚いてしまつて。俺は、広瀬千尋だ。よろしく。ところで、これから俺はどうなるんだ？」

「間もなく安全圏に到達します。そこであなたをおろすつもりです。そして、お願いがあるのです。私達のことを決して口外しないでいただきたいのです。」

千尋は引き下がる事が出来なかった。60年ぶりに姿を現した白い戦艦。ついに現れたのに命がけでここまでやって来たのに、何も記事にすることが出来ないなんて。千尋は食い下がった。

「桜花さん。俺はあんたたちの存在を信じてここまでやって来た。命もかけた。それに俺はフリーライターだ。これを記事に出来ないなんて無理な相談だ。」

必死な千尋を見て、桜花は悲しそうな表情を浮かべた。一瞬うつむいた桜花はきつと顔を上げると毅然とした顔で言い放った。

「千尋さん・・・あなたには死んでいただくことになるかもしれませんよ。」

「えっ？」

零式桜花が千尋を連れて脱出した頃、オロチと「まほろば」の闘いが始まった。「まほろば」の次の攻撃を待たず、起き上がると間髪入れずに光弾を発射した。だが、「まほろば」は無傷だった。

「艦体各所に損傷なし。第2装甲板衝撃拡散機能順調に作動中。」

オペレーターが報告した。「まほろば」は全部で48の装甲板で覆われている。第一層はタングステンを遥かに超える硬度、そして、1万度まで耐えられる超合金Zで覆われており、極めて薄い装甲であつたとしても、通常砲弾では理論上破壊されない防御力を有している。第二層は衝撃吸収合金、超合金Yでコーティングされている。あらゆる衝撃を拡散、吸収する極めて柔らかい超合金である。この二つの超合金を48層に渡って複雑に組み合わせることで、「まほろば」は核攻撃ですら無傷で耐えきれほどの驚異的な防御力を獲得することができたのだつた。

「グランドクルスを使う。まずは、ヤツを東京湾までおびき寄せなくてはならない。短誘導噴進弾装填。それから、主砲戦準備。主砲選択、51cmレールガン。」

昇が指示を出すと、直ちにオペレーターが作業を開始した。

「短誘導噴進弾、各VLSに装填。『まほろば』戦闘モードに移行。高度、200mへ降下します。」

「まほろば」は高速巡航時、大気中の空気抵抗を考え、主砲やその

他の武装、そして、艦橋を格納している。「まほろば」は降下と同時に格納された艦橋を上昇させ、主砲を展開させた。砲塔が一段上に競り上がると、甲板の下からエレベーターが現れ、巨大な砲身が姿を現した。51cm電磁速射砲、レールガンである。

「艦長、戦闘モードに移行完了。」

「短誘導噴進弾。発射！」

108発のミサイルがオロチに向かって飛来した。オロチはすかさず身を震わせると、周波バリアを展開した。ミサイルがオロチにたどり着く前に爆発した。オロチはまるであざ笑うかのように鳴き声をあげた。

「よし。そのまま後退するぞ。噴進弾攻撃続行。」

さらに108発のミサイルが発射された。オロチはさらに周波バリアを展開してミサイルを無力化する。このまま堂々巡りかと思われたが、煙が離れたとき、「まほろば」はオロチからさらに離れた場所にあった。

煙が晴れたとき、「まほろば」の姿を認めたオロチは凄まじいスピードで海へ向かいだした。

「よし・・・来い！」

時速120kmで疾走するオロチは数分とかからずにその巨体を海に没した。そして、長い首を海面からだすと、光弾と同時に激しい衝撃波を「まほろば」に浴びせた。「まほろば」はその衝撃波をさらに受け流した。

「衝撃波で戦うのはお前たちだけと思うなよ。グランドクルス発動！4式衝撃収束飛行爆雷、発射！」

「まほろば」から4発の爆雷状のロケット弾が発射された。オロチの上空で制止すると。爆雷同士が対角線状に、まるで、十字を描くように光が放出された。そしてさらに円状に光が爆雷同士を結びつけたかと思うと、4つの爆雷が一気に爆発した。光の柱が上った次の瞬間、衝撃で海水がはじかれ、大きな水柱が上がった。

零式桜花II型スペック

全長：9.5 m

全幅：8 m

最大速度：マッハ3.2

武装：20 mmバルカン砲

空対空誘導噴進弾

「まほろば」に搭載された無人戦闘機。各機の動きは統合システム「桜花」によってコントロールされる。故に零式桜花それぞれは桜花の端末に過ぎない。無人機故に人間の動きでは予想出来ない空戦機動を行うことが出来るばかりか、救助、偵察、攻撃、制空、電子戦に対応出来る多用途機でもある。

また、レーダーは機首でなく、胴体上下に設置されており、機首にはさらなる秘密が隠されていると言われている。

桜花はM機関が開発した人工知能であり、人工知能ならではの冷静な計算が可能だけでなく、各センサーを通して五感を感じることが出来、人間と同じ感情を有している。囲碁が趣味で、待機中のときなどは誠や昇と指すことがある。腕前は人工知能なのに、誠や昇に負けることもしばしばである。

桜花の涙

グランドクルスの爆発と同時に大きな水柱が上がった。グランドクルスの衝撃波が海水をはじき飛ばしたためだった。グランドクルス、正式名称を4式衝撃収束飛行爆雷と言う。一定の間隔で敵を包囲した爆雷が、一斉に爆発し、それぞれの爆雷が爆発を上下方向にのみ爆圧を逃がすようにコントロールする。通常は、爆発による衝撃波は四方に拡散するのだが、このグランドクルスに限っては、上下方向にのみ爆発が拡散することで、驚異的な破壊力を獲得していたのだ。

60年前、アメリカ艦隊を消滅に追いやった、究極の爆雷である。

周波バリアごと爆圧に押しつぶされたオロチはしばらく動けないようだった。爆発の衝撃波と熱風をもろに受けたのだ。その威力は新星攻撃隊の攻撃の比ではなかった。

「まほろば」はまだ警戒態勢を解いてはいなかった。

「倒しましたね。艦長。」

副長の誠が昇に言った。

「いや、まだだ。副長。」

昇はモニターを指差した。赤外線センサーの画像を見ると、オロチの影の熱量が徐々に増しているようだった。

「なんと言っ回復力だ。」

誠は、改めてこの生物の恐ろしさを感じていた。昇は、オロチの様子を見て、次の命令を出した。

「主砲、発射準備。目標が現れ次第、自動追尾で発射せよ。弾種は、3式徹甲弾。出力70%で発射せよ。」

3式徹甲弾。それは「まほろば」の主砲弾の中で、最弱の弾種であった。

「了解。主砲発射準備。自動追尾システム作動。目標の赤外線パターンに合わせ、主砲発射。3式徹甲弾装填開始。」

「まほろば」の主砲塔が静かに動き始めた。オロチの居場所に照準を合わせ、仰角も完璧に調整されていた。主砲塔の内部では、数十発の主砲弾をこめたカートリッジが主砲塔内部の加速レールに接続された。

「あなたには死んでもらうことになります。」

零式桜花の中で、桜花は千尋に言った。

「私達の技術力は世界の軍事バランスを一挙にひっくり返すことも、『まほろば』を得ただけで、世界を滅ぼす力をも持っているのです。現在、地上にあるどんな兵器をもつてしても『まほろば』を破壊することはできません。だから私達は国を捨て、世界のためにその力を使おうとしているのです。私達の力を暴くもの。それだけでも私達にとっては脅威なのです。」

千尋は悲しそうに話す桜花を見た。

「桜花さん。あなたは言うてはならないことを言ってしまった。あの艦の名前が『まほろば』ということ。そして、あの艦がそれほどまでに強力な艦であるということが俺にわかってしまった。」

モニターの桜花は口を押さえた。

「あなたは本当に人間のようなコンピュータだな。俺はもう、死ぬしか無いのか？桜花さん。」

「・・・千尋さん。」

「記事に書けないこと。俺にとっては悔やんでも悔やみきれないことだ。思い残すことは山ほどあるが、最後を覚悟しなきゃな。桜花さん。あんたに会えてよかったよ。」

そついうと、千尋は静かに目を閉じた。

「千尋さん！」

モニターの桜花は目に涙を浮かべていた。

オロチは眠っていた。静かに回復の時を待っていた。どんな生物でも睡眠中は隙だらけになる。だが、オロチはあえてそうしていた。地球上のどの生物でも、自分たちを殺すことが出来ない。オロチの無防備な睡眠は、自分たちが殺されないことへの絶対の自信の現れであった。

だが、その眠りも永くは続かなかった。オロチのもつ驚異的な回復力が戦闘可能なシグナルをオロチの五体に発したのだ。オロチは自分を昏倒させた敵に最大出力の光弾を撃つべくその巨体を海水面に現した。

決着のとき

オロチが海水面から姿を現した瞬間、「まほろば」の2基の主砲塔から光が放たれた。主砲弾と大気の摩擦で生じた光であった。オロチもまた、最大出力の光弾を発射した。光弾と「まほろば」の主砲弾はお互い狙い済ましたかのように交差した。

しかし、次の瞬間、オロチの渾身の力をこめて放たれた光弾は霧消した。主砲弾の威力がオロチの光弾の威力に勝り、光弾が拡散したのだ。オロチの目が、驚愕の色で染まった。だが、その時間は長くはなかった。一秒もかからず「まほろば」の3式徹甲弾がオロチを貫いた。機関砲とほぼ同じ早さで発射された主砲弾は131発に及んだ。オロチは断末魔の叫びを上げること無く、肉片と化して吹き飛んだ。

主砲弾の衝撃はオロチの上半身を肉塊にただけでなく、オロチの下半身を浮き上げ、遠く離れた東京都庁まで吹き飛ばした。半身を吹き飛ばしたとはいえ、体長50mはある代物である。都庁ビルは衝撃によって崩れ落ちた。

衝撃は習志野駐屯地の地下司令部にも伝わった。職員が倒れ、デスクに乗せてあったものばらばらと落ちた。

「全員落ち着け！司令部はこの程度ではびくともしない。」

特殊戦術研究旅団長の山根は、周囲のスタッフに言い聞かせた。スタッフたちは自分たちのコンソールに向かって、事態の収拾にあたった。

そのころ、東京湾上空の「まほろば」艦橋では、主砲のあまりの威力に艦長の昇ですら驚いていた。

「これが51cmレールガンの威力か・・・先代の艦長もこの艦の性能に恐怖を覚えるのもうなずける。」

「しかし、それでも、出力は抑えめです。実際本気で放たれれば、さらなる威力になるでしょう。」

副長の誠が言った。

「そうだな。・・・恐ろしい力だが、ついにヤツを倒した。これを俺たちが人類の平和を守ることだけに・・・」

昇がその先を言おうとしたとき、桜花から通信が入った。

「どうした？桜花。」

桜花は思い詰まった表情をしていた。人工知能の桜花がそのような表情をすることを昇も誠も見ることが無かった。

「艦長、折り入って相談があるので。先ほど救助した人を『まほろば』に乗せて欲しいのです。」

「あまり穏やかじゃないな。桜花。ことの顛末を聞かせてくれ。」

桜花は千尋と知り合ったこと、自分のエラーで、彼に「まほろば」の情報の一端を話してしまったことを話した。昇はため息をついた。

「私が至らないために、申し訳ありません。」

桜花はモニターを通して、昇に頭を下げた。昇は手を振った。

「仕方の無いことだ。桜花。彼を連れて来てくれ。話はそれからだ。」

「ありがとうございます。艦長。」

千尋を乗せた零式桜花は「まほろば」に向かって、飛んでいった。

そのころ、東京湾を哨戒中のP-3C対潜哨戒機が消息を絶った。さらに新たなオロチが、東京に向かっていたのである。

死・・・そして

「まほろば」は艦橋後部のハッチを開けると零式桜花を収容した。格納庫にはすでに艦長の昇と副長の誠がいた。

格納庫に係留された零式桜花は千尋に話しかけた。

「千尋さん。降りてください。」

「どうするつもりだい？桜花さん。」

千尋は目を開けると、桜花に尋ねた。

「あなたに逢ってもらいたい人がいるのです。」

そう言うとき桜花は零式桜花のハッチを開けた。零式桜花から伸びたはしごを下りると千尋の目の前にいた軍服の男が挨拶をした。

「『まほろば』艦長、敷島昇だ。君は、広瀬千尋君か。桜花から話は聞いている。」

「広瀬千尋、フリーライターです。」

千尋はぼさぼさに伸びた癖っ毛をかきながら、握手しようと手を差し出そうとしたが昇は手を出さず、かわりに銃口を千尋に向けた。

「君も桜花から聞いているだろう。君は俺たちの秘密の一端を知ってしまった。それを公表されることは我々にとってはまさしく脅威以外の何者でもない。桜花の言う通り、君には死んでもらう。」

「・・・覚悟は出来ています。艦長。」

千尋は目を閉じた。格納庫に乾いた音がした。千尋もその音を聞いたが不思議な事態が起こった。痛みをまるで感じなかったのだ。千尋は目を開けた。銃口から煙が出ていたが、音だけだった。昇は千尋に向け、空砲を撃ったのだった。

「どうして？」

千尋は昇に聞いた。

「君は、もう死んでいるんだ。千尋君。この「まほろば」に乗った時点で君はもう、普通の生活に戻れない。君には申し訳の無いことをした。せめてもの罪滅ぼしだ。君を我々の組織、M機関に迎えよう。そして、それが桜花の願いだ。」

昇がそう言った瞬間、虚空に画面が浮かんた。桜花が顔を赤らめながら微笑んでいた。

「君は桜花に気に入られたな。そんな人間は数えられるほどしかないぞ。」

昇は千尋を見て笑った。機械が人を好きになる。そんな人間以上に人間らしい桜花を千尋も好きだった。千尋は桜花に微笑んだ。

突如、格納庫に艦橋から連絡が入った。

「艦長、東京湾に以上な温度上昇を確認、敵性巨大生命体とされます。しかも複数。」

「わかった。すぐ艦橋に行く。・・・君もついてくると良い。」

「俺も・・・ですか？」

千尋は自分自身を指差した。

解放！必殺の艦首砲！！

「ああ、君は『まほろば』の力を見たいのdarou?これから、いいものを見せてあげよう。」

昇はそういつと千尋を連れて、艦橋に向かった。艦橋では東京湾の様子が手取るように見て取れた。燃え上がるコンビナートや都心、そしてこれから現れる黒い影。千尋はあまりに現実離れしているこの光景に飲まれてしまった。

「なんとこのテクノロジーなんだ。」

だが、千尋の時間は長く続かなかった。「まほろば」の眼前に、オロチが3体、その巨体を現したのである。しかも、その体長はさっき倒したオロチの倍を悠に超えていた。

「あ・・・あ・・・」

千尋は後ずさりした。東京を灰燼に帰したあのオロチの倍以上の化け物が3体もいるのだ。この「まほろば」ですら、ただではすまい。千尋はそう考えたが、昇は慌てるそぶりも見せず、副長の誠も涼しい顔をしていた。

「一体一体は面倒だな。艦首砲をつかう。艦首砲選択、硬X線レーザー砲、出力65%！」

昇は指令を下した。

「了解。艦首砲選択。硬X線レーザー砲、出力65%。艦首展開、

反射鏡調整開始。」

「目標、敵性巨大生命体。照準セット！座標軸、焦点調整、誤差修正開始。」

「まほろば」の艦首が展開し、中から大きなビーム砲が出現した。中には反射鏡があり、光に反射して美しく輝いていた。

「出力安定、発射準備完了！！」

オペレーターが報告した。

「撃てえ！！」

レーザー砲から発射されたレーザービームが反射鏡に反射され煌めいた。幾筋もの光条が「まほろば」の艦首でいくつも交差して艦首中央にある大きな反射鏡に収束された。

収束され、発射されたレーザービームは海を裂き、オロチ3体を粉々に粉碎した。

「すごい・・・」

千尋はその威力に驚愕した。

「『まほろば』の力は地上最強の力だ。我々ですら、その力を使うことを恐れるほどだ。だからこそ、我々はこの力を人類のために使わねばならない。そのために、どこの国家にも属しては行けないし、秘密にしなければならないのだ。」

昇は消し炭になって崩れ落ちるオロチを見ながら言った。千尋はそんな昇に声をかけられず。ただ見ていることしか出来なかった。

「さて、そろそろ基地に帰るとしよう。進路を南にとれ！」

「まほろば」はゆっくりその大きな艦体を南に向けるとエンジンを点火し、空に消えていった。

市ヶ谷駐屯地地下では司令部にいた全ての人間がその映像に釘付けになっていた。特殊戦術研究旅団の精鋭たちを蹴散らしたオロチを苦もなく倒した圧倒的な力をもつ、謎の白い戦艦。山根は筑波にいる特殊戦術研究旅団、技術開発部長長沼教授を呼び出した。

「映像を見ました。山根陸将補。結論から申し上げます。我々ではあのテクノロジーのすべてを体現することは出来ません。現在建造中の『すさのお』ですら、恐らくあの戦艦の1,000分の1ほどの戦力しか無いでしょう。そして我々も、オロチに有効な迎撃手段を持ち得ません。これが現実なのでしょう。」

特殊戦術研究旅団の超兵器を開発した長沼博士でも、「まほろば」クラスの科学力を持ち得なかった。長沼教授は冷静を装っていたが、悔しさを隠し得なかった。

「そうか・・・」

山根は敗北感にうちひしがれた。

「ですが、我々の技術も向上しています。時間はかかっても、必ず

オロチを倒す力を作り上げてみせます。」

長沼博士はまっすぐ山根の目を見据えた。

「わかりました。よろしく願います。」

山根はそう言うと、通信を切った。目の前には火の海になった東京の惨状があった。これで、10年は復興にかかるだろう。多くの隊員を失った。オロチは謎の白い戦艦によって倒されたが、次に現れたときには「まほろば」が現れるとは限らない。次に来たときには撃退出来るだろうか・・・山根の問題は山積みであった。

「次は負けない・・・」

山根は誰にも聞こえない声でつぶやいた。

新たな敵

避難勧告が解除された東京に住民たちが戻って来た。廃墟と化した東京にはほとんど無傷な建物がなく、それぞれが、それぞれの家の前で、これからの自分たちの前途を思い悩んでいた。

編集長は、オロチの襲撃によって倒壊した出版社を回り、千尋の行方を探し、東京を歩き回っていた。倒壊した新都庁の都庁ビルで編集長は千尋の壊れたカメラを見つけた。

レンズは砕け、中のデータも粉々になっていたその無惨な拾いあげた編集長は千尋の死を実感した。

「千尋・・・」

編集長は千尋の分身と言わべきカメラを抱きしめ、若きフリーライターの死を悼んだ。

「これで良かったのですか？」

東京上空、2万5千m。航空機による追尾もほぼ不可能な高度に零式桜花はいた。桜花は自らの体内にいる人に尋ねた。

「ああ、フリーライター広瀬千尋は死んだのさ。もう先輩とは会えない。悲しいことだけど、後悔はしていない。俺は君たちに出会えたのだから。」

「千尋さん・・・これから、『まほろば』に戻ります。全速力でいきますから、気をつけてください。」

「桜花さん。俺はパイロットじゃない。Gに耐えられないよ。」

「大丈夫です。この機は人員の輸送も考慮されて設計されています。耐G中和装置も完備されています。安心してください。私の制御ですから。」

モニター越しで桜花は微笑んだ。無機質な人工物であるはずの桜花だが、千尋の目の前にいる桜花はまるで本物の人間よりも人間らしかった。千尋もまた笑って、桜花の微笑みを返した。千尋を乗せた零式桜花はその速度をあげ、一気に音速まで達し、空に消えていった。

地球遥か上空、衛星軌道上にある物体があった。それは、ながら宇宙空間に浮遊する城と形容されるべき代物であった。外面は白く輝き、宇宙ステーションとは遥かの異なる外見をしていた。

宇宙空間であるのに重力が存在するその宇宙城と言うべきものの中で、男が一人玉座に座っていた。その傍らに腹心と思われる男が一人立っていた。傍らに立っていた男が玉座の男に報告した。

「ミカエル様・・・生体兵器5号から8号の信号が途絶えました。」

「我々の生体兵器を破壊するものがあるとはな。面白い・・・アメリカはどうだ？」

ミカエルと言われた。人物は側近に尋ねた。

「生体兵器1号と2号がアメリカの大西洋艦隊と交戦中です。あと

少いで終わるでしょう・・・」

「始まるな・・・世界の終わりが・・・」

ミカエルは低く笑った。

「我々七天使が降臨したその時、世界の終末が訪れる・・・ふふふはははは・・・」

ミカエルたちの背後には巨大な人型をした7体の機械が現れた。そのどれもが神々しく、そして禍々しく見えた。

世界の終末が訪れるのか、そして、「まほろば」は七天使を止めることができるのか。物語は続いていく。

新たなる敵（後書き）

まほろば 第一部完了。

次回、まほろば第二部をお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4360f/>

まほろば

2010年10月11日01時10分発行